

東教育財団だより

発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
2-2-11 堺筋本町
西尾ビル6階
電話06(6262)7363
発行責任者 長谷隆雄

東教育財団は、三月一〇日に理事会と評議員会を開催し

平成二八年度の事業計画及び予算案を審議しました

するため、大幅な金融緩和を進め、超低金利政策を取り入れていきます。そのため、全国の公益財団法人は、その基本財産の運用収益が大幅に減少し、財団の財政基盤の弱体化に悩んでいます。

当財団では、基本財産二億七千万円を国債と地方債で運用してきており、平成二八年度においては一・七六%の平均運用利回りを確保できており、平成二八年度の事業計画及び予算は、ほぼ前年度並の内容となっています。

しかし、平成二九年六月には額面五億円・利率一・九%の地方債が満期償還を迎えます。さらに、当財団が設立百周年を迎える平成三七年六月には額面一〇億円・利率一・九%の国債が満期償還とな



(評議員会会議風景)

国では長引く経済不況を克服

ります。

現下の債券金利の状況を勘案すると、平成二九年六月満期償還を迎える地方債の買換えにより運用収益の減(五百万円程度)は避けられず、況や平成三七年六月満期償還となる国債の運用替え等については目論見も立て難い状況にあります。

したがって、平成二八年度中に、現下の債券金利状況下での資金運用のあり方、並びに、平成二九年度の運用収益減に伴う助成事業のあり方を真剣に検討しておく必要があります。



(理事会会議風景)

平成二八年度事業計画

◆ 助成事業

○ 助成対象となる団体

大阪市内に所在する学校教育法第一条に規定する幼稚園・小学校・中学校(私立学校を除く)・社会教育団体及び生涯学習団体、地域文化・まちづくり活動を行う団体

○ 助成対象となる事業

学校教育事業助成

大阪市内の学校教育の充実・発展に寄与する事業

社会教育・生涯学習事業助成

大阪市内の社会教育や生涯学習の充実・発展に寄与する事業

地域文化・まちづくり事業助成

大阪市内の地域文化・まちづくりの振興に寄与する事業

◆ 広報啓発事業

『東教育財団だより』の発行
財団の事業と大阪の文化・歴史を紹介する季刊誌を発行(年四回)

平成二八年度収支予算

◆ 収入（經常収益計）

三八、四一〇、〇〇〇円

【基本財産利息】 三八、四〇〇、〇〇〇円

【受取利息収益】 一〇、〇〇〇円

◆ 支出（經常費用計）

三八、九六八、〇〇〇円

【事業費計】 二七、六九三、〇〇〇円

・支払助成金 二二、五〇〇、〇〇〇円

〈支払助成金内訳〉

学校教育事業助成	九〇〇、〇〇〇円
社会教育・生涯学習事業助成	六七〇、〇〇〇円
地域文化・まちづくり事業助成	六八〇、〇〇〇円

・その他 五一九三、〇〇〇円

【管理費計】 二二、二七五、〇〇〇円

◆ 差引（当期経常増減）

△ 五五八、〇〇〇円

助成事例の紹介

平成二七年度に助成した事業の具体例を紹介します。

○ 学校教育事業助成

「豊かな心を育む行事活動

― 多様な体験を通して ―



↑（お茶遊び体験風景）



↓（パステル画遊び体験風景）

銅座幼稚園では、園児にお茶遊び・パステル画遊び・英語で遊ぶう・カプラ積木遊び・ピユアハー トミュージックや伝統芸能の鑑賞などの多様な体験をさせ、園児の豊かな心を育むとともに、保護者参加型にすることにより幼児教育

の啓発にも役立てた。

（助成額二〇万円）

「船場の伝統を

社会に有為な人材育成」



（キャリア教育体験学習 お仕事探検隊風景）

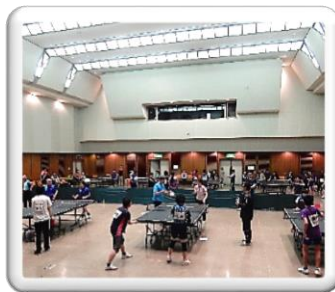
開平小学校では、船場に住む児童に確かな職業観・勤労観を持たせるため、学年毎に系統的・継続的なキャリア教育を推進した。そのため、船場にある企業や地域、ボランティア等とも連携し、社会全体でキャリア教育を進める体制を構築した。

学年別の具体的な取組例として、一年生「むかしあそび」・二年生「まちたんけん」・三年生「昔の道

具調べ」・四年生「大阪の農業・産業・工業」・五年生「船場の偉人から学ぼう」・六年生「お仕事探検隊（企業訪問）」が挙げられる（助成額六〇万円）

○ 社会教育事業助成

「体育・レクリエーション普及推進事業」



（ピンポン祭り）

（バレーボール大会）



（ソフトボール大会）



ソフトボール大会、軟式野球大会、バレーボール大会、卓球大会

ゴルフ大会等を開催し、また、夏休み期間中に小学校単位でラジオ体操を行うことで、区内のスポーツとレクリエーションの普及推進を図った。

(助成額五〇万円)

○ 地域文化事業助成

「中央区成人の日記念のコンサート」



一月二日(月・祝)に区役所をはじめ区内各種団体で構成する実行委が「成人の日記念のつどい」を開催し、新成人の門出をお祝いするとともに、成人になった自覚を喚起した。

(助成額二〇万円)

「北大江たそがれコンサート」

一〇月一〇日(土)と二六日(金)の両日、北大江公園で野外コンサートを開催する他、周辺事業所の自主開催によるライブコンサート等のリレー開催により、地域一帯の文化交流の輪を広げた。

これにより、地域住民、在勤者、学生等が地域の文化的環境を再認識するとともに、相互の交流を深め、都心のコミュニティづくりに寄与した。

(助成額一五万円)



↑(10/10 オープニングライブ風景)

↓(10/16 公園ライブ風景)



「パソコンお絵かき教室」



(お絵かき教室生徒作品)



玉造幼・中大江幼、及び、玉造小・中大江小・南大江小では、高齢者大学校でパソコンの講習を受けた高齢者を講師に招き、授業の一環として「お絵かき教室」を実施した。

これにより、子どもたちがパソコンの基本操作を学ぶとともに、

マウスでお絵かきという感動体験学習による創造的能力開発が行われた。

(助成額一五万円)

「船場ガイドブック二〇一五」

船場地域の歴史・文化や暮らしに関する情報と街歩きに活用できる地図を内容とする小冊子(概ね二〇頁)を二万部発行し、船場まつりや船場博覧会等、秋のイベント月間を中心に、イベント会場等で配布し、イベントとともにまちの魅力を伝えた。

(助成額二〇万円)



大阪歴史(迷)探訪 ―杭だおれ・食いだおれ―

江戸の「八百八町」・京の「八百八寺」に対し、大坂が「八百八橋」といわれたように、江戸の「履きだおれ」・京の「着だおれ」に対し、大坂は「くいだおれ」といわれた。

「くいだおれ」には二説ある。その一つが「杭だおれ」である。豊臣期から江戸期にかけて、大坂では多くの堀川が開削され、俗に「八百八橋」と称されるほど多くの橋が架けられた。八百八は数が多いことを表現したもので、当時の実数ではない。天保二二(一八四二)年の『浪花橋々繁栄見立相撲』では総数二〇五の橋が番付されている。このうち幕府が費用を負担した公儀橋は一
二橋(鴨野・京・野田・備前島・天満・天神・難波・高麗・本町・濃人・長堀・日本)に過ぎず、残る一九三橋は有力商人の出資により架けられ、橋筋の町衆たちが維持する町橋であったから、よく倒れる橋の杭の

所為でまちの人々が倒れる、というのである。

ところで、大阪市内の橋は、一時最大で一五〇〇を数えたこともあったが、車社会が進んだ昭和四〇年代、堀川が次々と埋め立てられて道路となり激減した。市内の橋が八〇八まで減少したのは昭和五〇年のことであるが、平成一八年には八八一橋まで回復した。

「くいだおれ」のもう一つの説が「食いだおれ」である。大坂が天下の台所といわれた時代、食文化が発達し、大坂の商人がその財力と商人ならではの知恵や工夫でそれを支持したので、大いに充実・

発展したが、あまりにも食を追及しすぎたために身上を潰したことから、食いだおれといわれるようになったのである。

食文化が発達するには、先ず食材が必要である。大坂は水路交通に恵まれた物資の集散地であり、食材が豊富であった。

地場産業としての野菜作りも盛んで、木津や難波のネギ・干瓢、天王寺や平野の蕪・大根、住之江のサツマイモ、毛馬胡瓜などの浪速野菜が栽培され、天満の青物市場に集まってきた。加えて先進的な栽培法も取り入れており、文化

年間には温室栽培が始まっている。また、金で買った肥料(金肥)で土地を肥し、三毛作も行っている。金肥の代表が干鰯で、泉州沖のイワシが不漁のときは松前のニシンで代用した。

食材が揃えば、それを美味しくする出汁が必要となる。調味料は、竜野の醤油、湯浅の味噌、赤穂の塩が堂島に運ばれてきた。出汁をとる昆布は北海道松前から、鰹節は土佐や紀州から海路で大坂に入った。

大坂の出汁は、昆布のグルタミン酸と鰹節のイノシン酸を複合させて旨味を増幅させ、さらにコハク酸が含まれる酒を少量足して旨味を引き立て、大坂の味がつけられた。

食材に恵まれ、旨い出汁があり、腕のよい料理人がいても、包丁がなくては料理はできない。包丁といえど有名な堺で、たばこ包丁に始まり、元禄年間には出刃包丁、薄刃包丁などの調理包丁がつけられた。

料理を美味しくいただくには、飲み物も必要である。お茶は宇治から良質なものが入り、酒は灘・伊丹・池田から集まった。

このように、豊富な食材に旨い出汁の工夫、道具(包丁)のよさと銘酒・銘茶が、大坂の食文化を生み、大坂商人が育て、その伝統が現在まで引き継がれている。

(槇野 勝・記)

*このコラム欄への投稿を募ります。
テーマは「おおさか」です。一五〇〇字程度でお願いいたします。

